

過去のイメージを繋ぎ合わせて

CONNECT THE PAST IMAGES

島守 彩寧
Ayane SHIMAMORI

Philosopher Bergson states that when humans perceive things, they do so with reference to memory, and that what is perceived in this way is called an image. Images of the past lose their sense of scale over time and become fundamental. The subject of this project is the personal memories that form the ego of the "I," the only distinguishable image in this world. I will make models of these images and design my own house using them as parts. The inner self, which is not directly expressed, is depicted as something that can be perceived from the outside.

Keywords : Image, memory, housing, epistemology, perception, spatialization

イメージ, 記憶, 住宅, 認識論, 知覚, 空間化

1. 序論

1.1 背景

私が考え事をするときには必ず、自分の記憶を参照することが不可欠である。記憶というものは案外正しさを保つことは難しいが、時間がたち、新しく起こった出来事に次々と記憶が塗り替えられ、あるいは自分はいこうありたいという潜在意識の中で記憶が改変され、次第にスケール感のないものとなっていく。これについて、私は何か建築と接点を持つことはできないかと考えていた。

そんな中、『ベルクソン＝時間と空間の哲学』^{文1)}という本を、知人の紹介で手に取った。中でも、「イメージ論」という内容に興味を持った。その中身を要約するとこうだ。人間が外界の事物を知覚する際には、必ず記憶が介在する。知覚する際に介在する記憶には二種類ある。一つ目は、持続を可能にする非人称的記憶。二つ目は知覚をする当人の個人的記憶。^{注1)}このようにして知覚された事物をイメージという。

1.2 目的

本研究は、アンリ・ベルクソンの「イメージ論」について考察し、それを私自身の記憶に関して適用し、実際のいくつかの場面の記憶から建築を作っていく手法の一つを提示することを目的とする。またこれは、私自身を構成してきた記憶と自宅のイメージについて深く考えるための作品であり、建築と自己の主観的な記憶を繋ぐ提案を示すチャレンジでもある。

2. ベルクソン哲学の分析

2.1 ベルクソンの提唱するイメージ論

本論で中心的に取り上げる「イメージ論」は、認識論の分野に該当するものである。特に認識論上の立場として明確かつ洗練され、対立するものとして「实在論」「観念論」の二つがある。観念論的立場では、そこに花が咲いているとして、誰もあることを認識していなければ存在していない、と考える。認識関係を認識対象にとって本質的なものとみなし、認識者の精神に依存して対象が存在するという考え方である。实在論的立場では、そこに花が咲いているとして、人が花の存在を認識しているかどうかに関係なく、そこにあるのだから花は存在している、と考える。認識対象にとって認識関係はあくまで偶然なものであり、存在しているかどうかには関係がない。認識対象と認識者の精神は完全に独立しているという考え方である。^{文2)}

この二つの立場の対立を避けるためにベルクソンによって提唱されたのが「イメージ論」である。ベルクソン曰く、人間は外界の事物を知覚する際、必ず記憶が介在する。具体的に言うと、それが花であるという記憶があるから、花を認識できるということである。实在論の対象と精神の独立とも、観念論の精神による対象の存在とも異なり、対象は知覚者の記憶を介して存在する、といった見方である。こういった記憶の介在によって知覚された事物を「イメージ」という。

2.2 空間化すること

物質的世界の無限のイメージの中で、知覚によって外から知るだけでなく、感情によって内側から知ることができるという点で、

他のすべてのイメージからはっきりと区別されるイメージが一つあるという。それは私の身体である。特別なイメージである「私の身体」の役割は、他のイメージに対して事実上とることが可能なくつもの行動の中から、何らかの行動を選ぶことである。そして過去のイメージの役割は、その決断をより良いものとするにある。^{文3)}

背景で語ったように、記憶というものはありのままの形をとどめておくことが難しいが、それは悪いことではない。ベルクソン哲学の中では、「空間化」という単語が良く用いられる。ここで言う空間化というのは、時間や物事を分けることを言う。楽しいことをしているときの時間の進みは、時計的な時間と比べて圧倒的に速い。早く帰りたいと思っているときの道ほど長く感じられるし、夢や想像の中で描かれたものは現実のスケールを飛び出している。このように、言語や単位によって定義しきれない、つまり空間化できない、内面的に経験されるものこそ、人間にとって本質的で、根源的であるとベルクソンは主張する。^{文4)}

私という存在を特別たらしめた過去のイメージは、特に「自身の経験として流れてきた」ものにあたり、空間化できないはずの豊かなものである。それらを敢えて家として建築物に起こし、私自身の内側に留まっていたイメージを外側からも知覚できるものとする。そうして出来上がったものは、確かに感覚上「私の家」であるが、現実にある私の家をそのまま作るよりはるかに実際感覚や感情に近いものが生まれる。私しか感じることでできなかったイメージを他人も享受できるようになり、さらに私という存在を外側からも特別たらしめる根源的なものとなるのではないか。

3. 自己の過去のイメージの分析

3.1 対象とする過去のイメージ

私を内側から形成した過去のイメージとして、私だけが経験し

たとえられる、強烈な心情や状況にあり、私の自我を強く引き出した、私にとって大きな意味のある瞬間を対象とする。また、そういった瞬間はごく最近にも訪れているが、ある程度過去のものでないと過去のイメージとしての誤認、美化、多層化^{註2)}といった変化が起こっていないため、今回は敢えて高校生のころまでの記憶のみに限定し、当てはまる記憶を12個選定した。それらを時系列に並べ、それぞれの物的状況や心理的状況、私が後から思ったことなどを分かる限り加えたエッセイ文と、それを立体化した模型写真を作成した(図1)。

3.2 考察

作成した模型について、時系列、感情面、自分の立ち位置、全体形状に着目して考察を行った。(図2)

(1)時系列について

未就園児から幼稚園の時までの記憶は、私だけでなく人間にとって原初的な感情・感覚を銘記した場面である。小学生の時の記憶は、自分という個の存在を強く意識し、発揮している時期と言える。そして中学生・高校生の時の記憶は、現在に至るまで自分の軸となっている考えを見つかったり、自分を客観視したり、年を重ねたことによる前後の経験との比較をしている場面が多い。時系列に並べると、私という存在の知覚が、内側からどんどん進んできているのではないか。

(2)感情面について

ポジティブな記憶は時間感覚が曖昧になっており、実際より長引く方向に補正されている可能性がある。ネガティブな記憶は比較的鮮明に覚えており、強烈な感情を抱きながらもその当時は何もできなかった場面であることが多い。どちらにも分類されない記憶は、最初からあまり感情の介入しない中立的な記憶だったわけではなく、ネガティブだった出来事が後から考えた学びによってプラスに補正

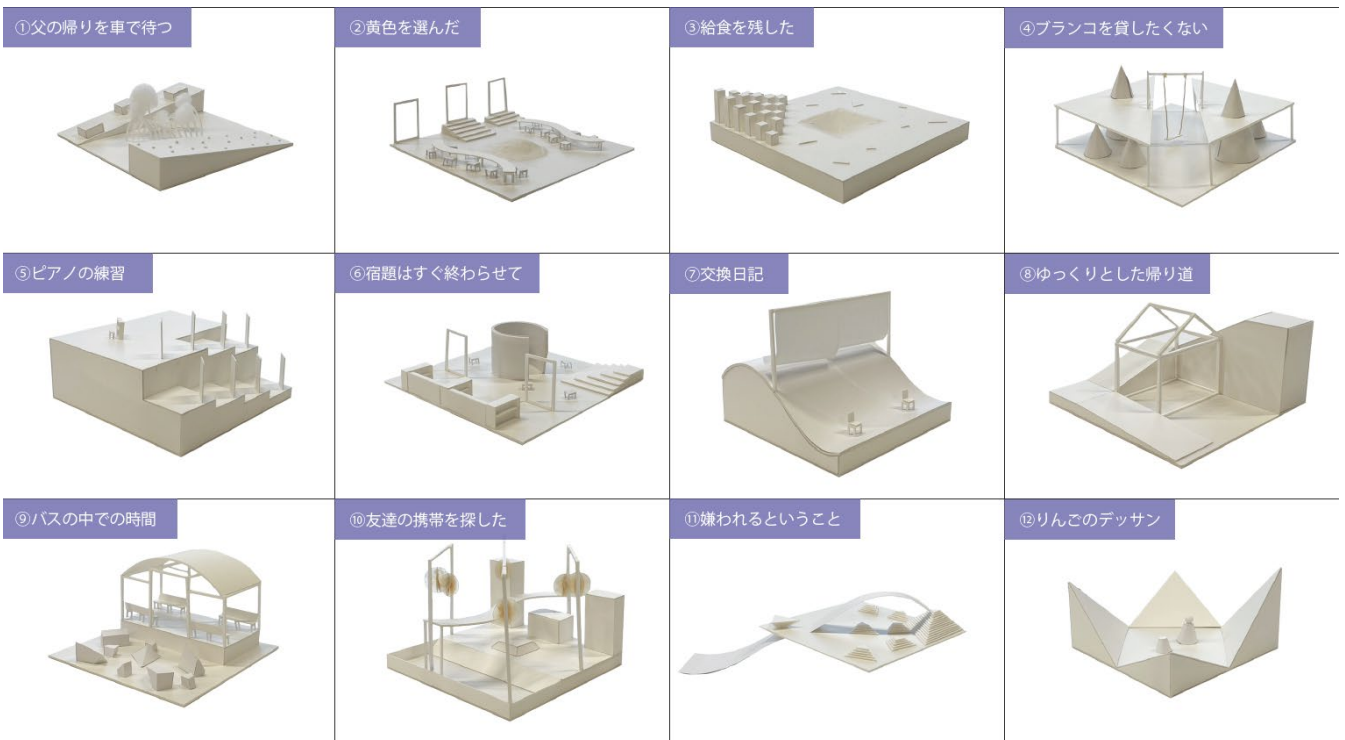


図1. 過去のイメージの模型

されたり、ネガティブな要素とポジティブな要素が混在しているものである。このように、当時の感情より記憶の補正具合に差があることが分かった。

(3) 模型における自分の立ち位置について

自分の立ち位置がはっきりしていない模型(全体型)は自分の立ち位置をそもそも覚えていなかったり、覚えていてもこの記憶の中では重要ではないものである。そのため建築として起こしたときに、私がどこにいるかは重要ではなく、全体の構成から得られる感覚に重きを置く必要がある。

自分の位置がはっきりしていて、それが何か特別な状態にある模型(特権型)も自分の立ち位置は重要ではなく、自分の特権的な状態にあることを誇張して示すために自分の立ち位置を指定しているものである。そのため建築としては私の位置というよりも、置かれている心理的状况を重視する必要がある。

自分の立ち位置をただ示している模型(存在型)は特に自分の心理的立ち位置に大きな変化はないため、実際と近い状態に自分がただ存在しているものである。そのため建築にする際は心理的状况の再現、物的状況から得られる感覚ではなく、自分がそこにいるという、居住者(私)の視点場が重要となる。

(4) 模型における形態について

鋭利型は当然ながら主にネガティブな記憶の模型であり、自分に対して害を与えてくるものであったり、あるいは自分自身の過去の負のイメージだったり、あるいは自分自身だったりする。いずれも自分に対して覆いかぶさってくるような構図をとっているが、上に向かって凸型を成しているため、上昇的な感覚も起こさせる。

箱型は自分自身や対象が箱型を成しているというより、物的状況やそのメタファーを表現するために箱型が用いられている場合が多い。そのため土台として下部に箱型があり、下に重心があって安定感のある印象を生む。実際の状況としても感情的・物的状況的に静かな場面が多いため、流れていく時間に抗うような静的な空間となっている。

曲線型は鋭利型とは反対にポジティブあるいは比較的和やかな場

面が多い。『交換日記』のみ和やかな場面ではないが、これは波打つような自身の気持ちと立ち位置の変化を表している。曲線は温かみのある和やかな印象を与えるものであるが、時に変化・動を表すものとなる。また、これらは共通して囲まれた落ち着いた空間を提供するという役割を果たしている。

4. 設計提案

私の家の中でも私が特に思い入れがあったりよく見た風景を12か所選定し、その場所のスケッチを行った。さらにそのスケッチから抱かれたその場所の印象、過去の思い出、場所の特性などを分析し書き加えた(図3)。過去のイメージの模型と視点場のスケッチをそれぞれ似た感覚を引き起こさせるものを対応させる(図4)。

パーツとして過去のイメージを用いつつ、挙げられている自宅の各部分を作っていく。過去のイメージの模型を建築に落とし込む手順を以下のように設定し、設計を行った(図5)。

- ① 玄関ポーチの位置と形状は始点として固定する。
- ② 建築的合理性を完全に無視して各視点場に対応する過去のイメージの模型を組み合わせ、配置する。
- ③ 出来た空間が果たしうる役割を元の配置とは関係なく与える。
- ④ 建築的合理性を考慮して形状や配置を変形する。

例えばリビングの視点場のスケッチでは、全体的に大きな家具が多く重心が下にある印象、繋がった3つの部屋の間であるという空間の連続性、家具と部屋のサイズ感に対する違和感などを感じた。空間の連続という点では『宿題はすぐ終わらせて』の教室と廊下という連続した空間が似ている。サイズ感に対する違和感や重心が下にあるような印象は『交換日記』の模型に通じている。波打つ床面はちっぽけな3人に対して大きすぎるサイズであり、意識を下に向けさせるように感じさせる。ドアの先に本棚の置いてある空間と、自分が円形の什器に囲まれており周囲に机が整然と並んでいる空間を連続させ、天井を波打たせることで立場の変化を感じさせる空間とした。本棚の置いてある空間を書斎とし、什器に囲まれた場所をキッチンとした。また波打つ天井の空間を二階とし、リビング、寝室を連続させて天井高の変化によって緩やかに区切った。

	時期	感情面	自身の位置	全体形状
①父の帰りを車で待つ	初期	ポジティブ型	特権型	曲線型
②黄色を選んだ	初期	中立型	全体型	曲線型
③給食を残した	中期	ネガティブ型	特権型	箱型
④ブランコを貸したくない	中期	中立型	存在型	鋭利型
⑤ピアノの練習	中期	ネガティブ型	存在型	箱型
⑥宿題はすぐ終わらせて	中期	中立型	特権型	曲線型
⑦交換日記	後期	中立型	特権型	曲線型
⑧ゆっくりにした帰り道	後期	ポジティブ型	全体型	箱型
⑨バスの中の時間	後期	ポジティブ型	全体型	箱型
⑩友達の携帯を探した	後期	中立型	存在型	箱型
⑪嫌われるということ	後期	ネガティブ型	存在型	鋭利型
⑫りんごのデッサン	後期	ネガティブ型	特権型	鋭利型

図2. 過去のイメージの模型の類型化

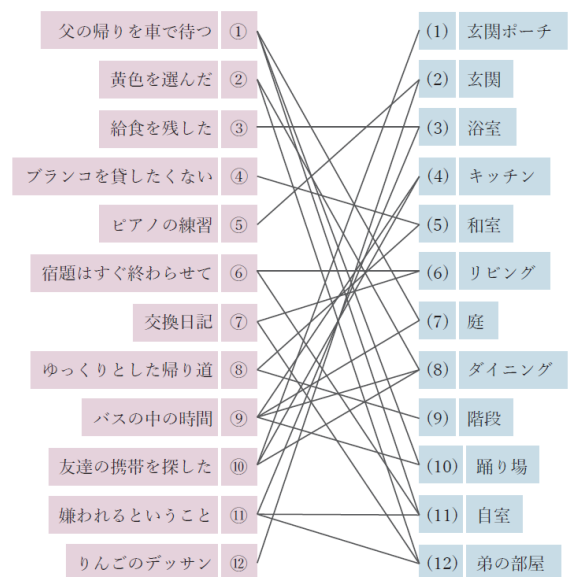


図4. 過去のイメージと視点場の対応

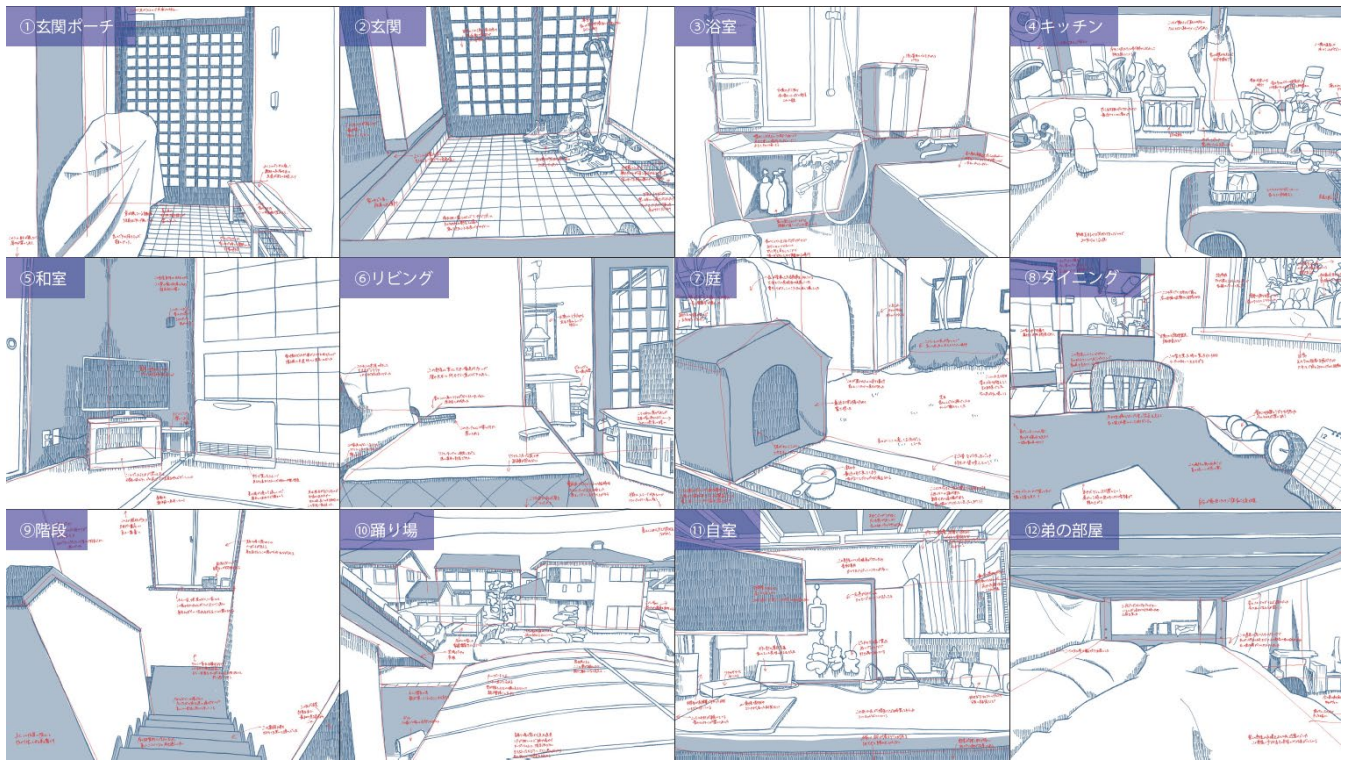


図3. 自宅の各所のスケッチ

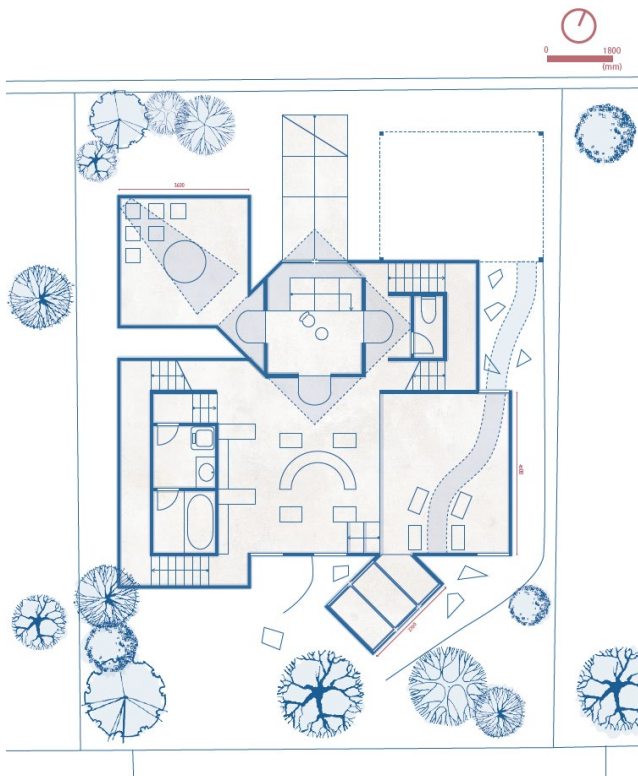


図5. 1F 平面図

5. 結論

本提案では哲学者ベルクソンの著書『物質と記憶』にて述べられている「イマージュ」という概念に着目し、物質的世界に存在する全てのイマージュのうち唯一他とは明確に区別されるイマージュである「私の身体」を題材として扱った。「私の身体」を他のすべてのイマージュから区別し、特別たらしめる要因は、外側からその存在

を知覚できるだけでなく、感情や感覚という面で内側からも知覚できるといことである。私という存在を内側から知覚させている、私自身の自我を形成するきっかけとなった、12個の記憶を対象とし、自己の内面や記憶という直接的に表出することのないものを外側からも知覚できるものとして立体物に描く一つの手法を示した。

私たちが普段他人に見せるのは、楽しかった思い出話だったり、綺麗に整頓された部屋だ。しかし今回扱ったのは、なかなか言葉に表すことのない、決して美しいとは言えないかつての記憶や、ちぐはぐとした雑貨の入り乱れた不格好な実家での暮らしの感覚である。実はそういった不完全で美しくない部分を含むものにこそ、現在の自分に対して常に無意識に働きかけてくる大事なイメージが含まれていると思っている。この作品を見る人にとっても、本提案がそれを意識するきっかけになるのではないだろうか。

参考文献

- 1) 中村昇：ベルクソン＝時間と空間の哲学，講談社選書メチエ，2014
- 2) 上枝美典：現代認識論入門 ゲディア問題から徳認識論まで，勁草書房，2020
- 3) アンリ・ベルクソン：心と身体 物質と記憶力 精神と身体の関係について，駿河台出版社，2016
- 4) アンリ・ベルクソン：物質と記憶，講談社学術文庫，2019

注

- 注 1) 非人称的記憶というのは、時間、場所、歴史など、客観的事実に基づいており、誰でも知ることのできる記憶のことを指す。それに対し個人的記憶というのは、その人しか知りえない何がどうしたといった主観的な記憶のことを指す。
- 注 2) 記憶の誤認、美化、多層化とは、出来事が起こった時からある程度時間が流れることで間違った情報を記憶してしまったり、自身がこうありたいという潜在意識により良い方向に記憶の内容が書き換えられてしまったり、他人の記憶や別の場面と混じって曖昧になってしまうことを言う。